

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成果報告書

平成26年6月25日

財団法人京都大学教育研究振興財団  
会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 文 学 部

職 名・学 年 非常勤講師

氏 名 八 木 堅 二

助成の種類	平成26年度 ・ 若手研究者在外研究支援 ・ 国際研究集会発表助成	
研究集会名	国際アジア言語地理学会 International Conference on Asian Geolinguistics 2	
発表題目	Geographical succession between monosyllable tones and sandhi forms in Shanxi	
開催場所	タイ・バンコク・チュラロンコーン大学	
渡航期間	平成26年 5月23日 ～ 平成26年 5月27日	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有( )	
会計報告	交付を受けた助成金額	150,000 円
	使用した助成金額	150,000 円
	返納すべき助成金額	0 円
	助成金の使途内訳	渡航費、滞在費 ----- ----- -----

## 国際研究集会発表助成Ⅱ期／成果の概要

文学研究科 非常勤講師  
八木堅二

### 【学会概要】

国際アジア地理言語学会は、本会が一昨年の初回会合（東京）に続く二回目の新しい会合であるが、日本を含むアジアにおける言語現象を一国にとどまらず汎アジア的な視点から捉え、アジア周辺の言語分布の成立過程を解明し、普遍的・個別的言語研究を発展させることを目的としている。アジア全域から周辺地域にまたがる言語地理学の唯一の国際的な専門会議として、学術的に大きな意義を有し、専門領域の異なる研究者間の交流を促す効果も有している。

今年の会合では、中国語、日本語、アイヌ語、朝鮮語、タイ語、ベトナム語、チベット語、クメール語、タラウド語、ジンポー語などに関する発表が行われ、一言語内の方言の比較は言うに及ばず、近隣諸言語の対照を含む大きな視野を持った議論が活発に行われ、普遍言語的な観点からも個別言語的な観点からも充実した会となった。

### 【発表概要】

報告者は「Geographical succession between monosyllable tones and sandhi forms in Shanxi」というタイトルで、中国山西省内における連読変調調形の分布と単字調の分合状況、及び単字調調形との関係を言語地理学的に考察し、その変遷過程について論じた。

山西省内の舒声二音節連読変調には、①前字（第一音節）のみ変調するもの、②後字（第二音節）のみ変調するもの、③両者とも変調するものに分けることができるが、本論では①前字のみ変調するタイプの調形を扱う。変調と単字調の関係については、a 変調後に単字調の調類が中和・合流するタイプ、b 単字調では合流する調類が変調後に分化するタイプ、c 調値のみ変化し、合流・分化の見られないタイプを区別し、変調形成の過程を考察する。

変調後に調類が分化するタイプは、主に単字調では清平と清上が下降上昇調として合流する中北部を中心に見られる。清平は前字調において、中西部付近では上昇調、北部付近では下降調となる傾向があるが、それらは隣接地域に分布する単字調の上昇調、下降調とそれぞれ連続的に分布している。清上では前字調で下降調となる場合が多いが、北部と中央部に分布する単字下降調との連続性が見られる。変調後に調類分化するタイプの変調は、各地で音韻的な条件が様々であり、歴史的な調類を条件とする存古的な変調である。

変調後に調類が合流する、或いは合流・分化の無いタイプについては、中部から南部にかけて多く分布が見られる。

中でも四声全てで、中央部では変調後平板調となり、東南部では変調後上昇調となる分布が目立つ。それらの変調調形は、それぞれの調類において、近隣に分布する単字調との連続性を

見て取ることができる。

変調調形は基本的に単字調の分布と連続性を有しており、このことは、変調と単字調において変化の方向性が基本的に同じであることを示している。

四声の全てで同一の調形に変化するというのは驚きであるが、実際に山西中部から南部付近では単字調において多様な合流のパターンが見られ、三声調体系にまで単字調類を減らす地点（古県）も存在する。さらに、状況によって全ての調類が一類となる方言（聞喜）も報告されており、現在山西中部から南部にかけての地域で、大規模な声調システムの簡略化の進行している状況を反映するものと考えられる。

### 【学会参加による成果】

方言研究の場、特に中国のように広大で無数の方言を有する地域においては、その地域内部における研究の膨大な蓄積があり、周辺言語の研究者の意見に耳を傾け、通言語的な視野から研究を見直す機会はありません。その点において周辺の言語の研究者との交流を通じ新鮮な知見や視点、方法論を多く学ぶことができた。また、普段交流する機会のない他言語の研究者と知り合うことができたのも、今後の研究の大きな励みとなった。

直前に起きた政変の影響で会場の変更や数名の発表者の辞退、予稿集編集の混乱（報告者に関する所では、配布予稿集の地図（第 213 頁）が提出原稿とは異なるものとなっていたが、再度正式な論文集を作成する由である）等があったが、会議自体はほぼ正常通り行われ、非常時にも関わらず運営スタッフの努力に感服する所である。

### 【謝辞】

今回の学会参加により、今後の研究を益する経験と知見を多く得ることができた。助成を賜った京都大学教育研究振興財団に深く感謝申し上げます。